

# グローバル社会における 平和構築のための 大学間ネットワークの創成

— 女性の役割を見据えた知の国際連携 —

平成 23 (2011) 年度 実施報告書

2012 年 3 月

お茶の水女子大学  
グローバル協力センター

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 23 (2011) 年度 実施報告書 目次

刊行にあたって

I 事業の概要

II 平成 23 年度の活動概要

1. 平成 23 年度の進捗状況
2. 「共に生きる」スタディグループの活動
  - 2-1 勉強会
  - 2-2 東日本大震災被災者支援ボランティア活動兼今後の支援活動調査活動
  - 2-3 東ティモール国際調査
3. 女子大合宿
  - 3-1 第 1 回女子大合宿
  - 3-2 第 2 回女子大合宿
4. 平和構築分野における国際調査
5. JICA 青年研修（アフガニスタン/女子教育）
6. 公開講演会
7. 国際シンポジウム

III 平成 24 年度以降の計画

IV 参考資料

1. 「共に生きる」スタディグループ 小松さん講演会報告
2. 「共に生きる」スタディグループ 東日本大震災支援活動レポート
  - 2-1 気仙沼での支援活動レポート
  - 2-2 福島での支援レポート

事業担当者、執筆者一覧

## 刊行にあたって

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」事業は、本年度で2年目となります。初年度で行った学外関係者との勉強会、シンポジウムの実績を基に、本年度は1年目の課題であったお茶の水女子大学内での平和構築にかかわる連携体制、活動拠点を築くことに注力しました。具体的には、「共に生きる」スタディグループを発足させ学年、専攻を超えたメンバーが参加する平和構築活動を行う礎を作ったこと、学内で公募を行い多様な平和構築にかかわる研究調査を推進・支援したこと、リーダーシップ養成教育研究センターと連携しながら海外の女子大学との連携を進める国際シンポジウムを実施したことなどがあげられます。

本年度の活動を通じて、お茶の水女子大学における平和構築にかかわる研究調査、支援活動を活発化させ、学内での協力体制を構築することができました。学生の活動では、「共に生きる」スタディグループによる東日本大震災にかかわる支援活動や、東ティモールでの国際調査など、学生の自発的な企画による「共に生きる」社会実現のための行動の場が広がりました。このような動きに伴って、様々な活動の中で、他大学間との連携の萌芽も生まれてきています。来年度はこうした学内の平和構築活動の礎を、さらなる国内外の大学間連携の発展、そして国際協力分野における人材育成に繋げていきたいと考えております。

本年度の活動の実施報告書は、研究、調査活動の実績をご関心のある皆様に広く発表し、関係の方々との連携を進めていくために、「実施報告書」「平和構築にかかわる国際調査報告書」「共に生きるスタディグループ、東ティモール国際調査報告書」と3冊に分けた構成となっております。お読みいただき、忌憚のないご意見、感想をお知らせいただけますと幸いです。

この場を借りてご協力をいただきました文部科学省、大学、援助機関の関係者の皆様、学長をはじめとする学内の関係者に心よりお礼申し上げます。本事業の残り2年間で、お茶の水女子大学の強みを活かした平和構築のための大学間ネットワーク、本学の人材育成プログラムをさらに発展させていけますよう、引き続きご協力のほどをどうぞよろしくお願いいたします。

グローバル協力センター長 石井クンツ昌子  
平成24年3月

# I 事業の概要



## 1. 事業の概要

### 【事業名】

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知的国際連携—」

### 【事業期間】

平成22年度から平成25年度（4年間）

### 【概要】

グローバル社会における平和構築を目指して、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

### 【事業実施主体】

国際本部グローバル協力センターが主体となり、大学院人間文化創成科学研究科と連携して行う。

### 【目的・目標】

本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である、開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。

お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている（第2期中期目標・計画前文）。さらに、世界の女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和の為に使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界の女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学が一つになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取り組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本および世界の女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の組織）による大きなネットワークによって、開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によって傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に

資することが考えられる。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

#### 【必要性・緊急性】

現在、国際社会においては、ポスト・コンフリクト地域における緊急人道支援が喫緊の課題である。特に、傷つきやすい女性や子どもに対する人道支援は最重要課題であるにも関わらず、その研究や人材育成に関する高等教育機関の取り組みは非常に脆弱である。そこで、本学を拠点として、先進国の大学と開発途上国、特にポスト・コンフリクト地域の大学、国際機関等と知的連携を構築し、緊急人道支援とそのための人材育成を行うことは、現代の女子大学に求められる重要課題であり、緊急の課題でもある。

#### 【独創性・新規性等】

本取り組みは、本学が拠点となって、女子の高等教育機関の国際的ネットワークを形成し、開発途上国およびポスト・コンフリクト地域における国際協力、緊急人道支援の教育・研究・実践を行うことを目指している。現在、高等教育機関が連携して、女性と子どもを対象とした国際的ネットワークによる支援事業および共同研究を展開している事例はない。それゆえ、独創性および新規性を持った取り組みである。

#### 【第2期中期目標及び中期計画との関連性】

第2期中期目標として、「世界各国・地域の国際機関・高等教育機関などと連携し、女性のエンパワーメントのための支援を強化拡充する」を掲げ、これに対応する中期計画として、「開発途上国の女子教育・幼児教育に関する支援事業を強化充実する」および「国内外の女子大学と連携して、女性のエンパワーメントに関する支援事業に取り組む」を策定している。先進国、開発途上国の高等教育機関と連携して、本事業に取り組むことで、目標の達成が可能となる。

## Ⅱ 平成 23 年度の活動概要



## 1. 平成23年度の活動概要

本年度は本事業の2年目であるが、1年目で課題となっていたお茶の水女子大学内の平和構築にかかわる活動の連携強化ならびに、学生の活動拠点の整備を重視した。平和構築にかかわる研究・調査、支援活動に関わる学内の公募を開始し、学生の活動拠点となる「共に生きる」スタディグループを発足させた。その結果、ジェンダー研究所やリーダーシップ養成センター等との協力の下での幅広い活動、学年、専攻を超えた学生による平和構築にかかわる自発的で多様な支援活動が推進された。今後はこれらの知見を国際分野における人材育成の推進に繋げていきたい。

### 【当初計画に対する進捗状況】

#### 実施計画

1. 国際会議の実施（世界各国の女子大学長クラス招聘）
2. 各（女子）大学や国際機関・援助機関と連携した開発途上国地域における女性と子どものための支援事業の実施
3. 国際機関、国際NGO等への大学生（院生）インターン派遣
4. 緊急人道支援、教育支援にかかる知見の発信
5. 国連機関と共催国際会議の開催

#### 実施状況

1. リーダーシップ養成センターが米国、イタリア、韓国の女子大学長、及び学生を招聘したA-WIL国際シンポジウムにおいて、学生セッションプログラムにグローバル協力センターが協力し、「共に生きる」スタディグループが活動を発表し、各国の学生と「共に生きる」未来の構築について議論をした。
2. 学内に「共に生きるスタディグループ」を発足させ、女性や子どもへの国際協力に関する勉強会を重ねた。9月および3月し合宿を開催し、関西の女子大学、国際機関、国際NGOの協力を得ながら、国際協力活動に関係する今後関連する調査、支援事業実施のための議論を行っている。また2月に、東ティモール国際調査を実施し、10名の学生とともに、平和構築における女性、青年の役割について、現地援助機関との連携の下で実施した。
3. 国連機関、JICA、国際NGOの協力を得ながら勉強会、調査、支援活動を実施する中で、学生の国際協力活動への関心を高めた後に、インターン派遣の斡旋をした。
4. 平和構築活動に携わる専門家を講師に招き、11月に公開講演会「共に生きる一本当に意味のある国際協力とは一」を開催。国際調査、学内教員、院生による国際調査により結果を報告書にまとめ、学会、シンポジウム等で発表予定。
5. ジェンダー研究所主催で、UNDPと連携の下、国際集中セミナーを実施した。

## 2. 「共に生きる」スタディーグループ

### 2-1 勉強会

#### 【目的】

全学的に、国際協力や平和構築にかかわる活動を広げるため、本年度7月よりグローバル協力センターにより「共に生きる」スタディーグループを発足させた。紛争や災害、貧困など様々な問題が国を超えて広がる中、専門、学年を超えて、様々なバックグラウンドを持つお茶大生が集まり、知見を共有し、意見を交換することで、特に女性、学生の視点から何ができるのか、考え、発信し、また行動する場とする。

#### 【実施概要】

- ・月に1回程度の会合。勉強会やイベントは、基本的に学生の企画により実施。
- ・活動内容：
  - お茶大教員、外部ゲストスピーカーのレクチャーによる勉強会の参加。
  - 国内外調査への参加。
  - 国内外の女子大学のスタディーグループとの交流、合宿勉強会への参加。
  - 海外女子大学との国際ワークショップ参加。
  - 参加者が自主的に提案する活動。
- ・参加資格：学部、専攻、学年を問わず、興味関心があるお茶大生。
- ・会場：お茶の水女子大学 第4会議室（学生センター棟4階）他 予定
- ・形式：ランチを食べながらのフリーディスカッション形式中心

#### 【成果】

- ・学年、専攻を超えたお茶大学部生、大学院生、約60名がメンバーとなり、専門的な国際協力活動という領域を超え、身近でできる学内での国際協力、平和構築への関心が高まった。
- ・本年度は導入の会合を5回、その後は学生の関心テーマ別に勉強会（学内の勉強会、女子大合宿、東日本大震災支援活動、東ティモール国際調査）を開催形した。

#### 【課題】

カリキュラム化されていない、学生の自主的な活動の場として、今後学生が持つ意欲を、各大学間のネットワークを活用しながら、継続的かつ具体的な活動に繋げていくための組織を運営する必要がある。



第1回  
勉強会  
7月上旬  
です！

# 「共に生きる」 スタディーグループに参加しませんか？！

〈こんなことができます〉

### 勉強会

お茶大教員、外部ゲストスピーカーによるレクチャーやディスカッション(ランチタイム)。

### 調査

国内外調査(定員あり)。  
海外女子大学との国際ワークショップ。

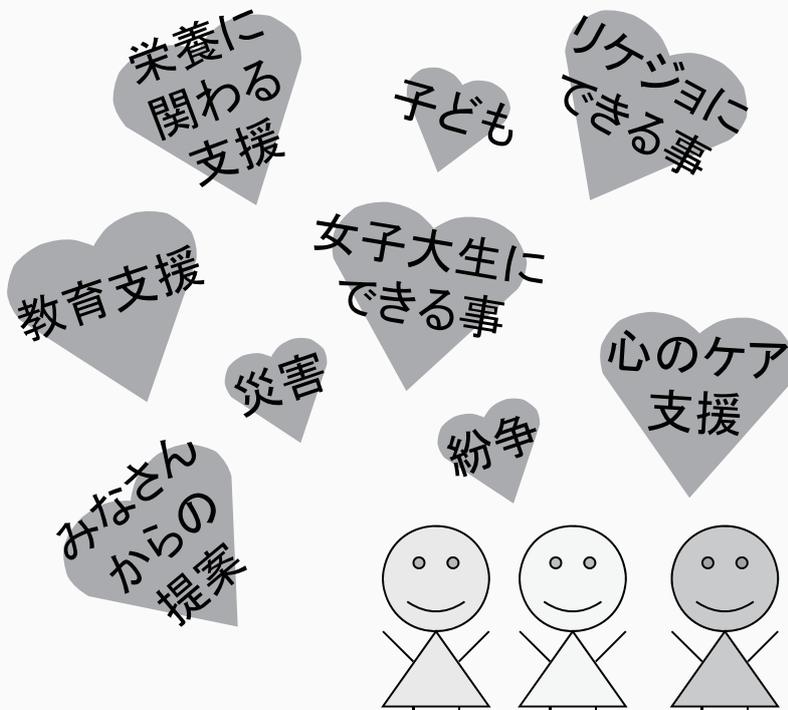
### 交流

国内女子大学との交流。  
合同勉強会の開催(合宿)。

### 支援活動

参加者が自主的に提案する活動。

★登録して頂いた方には、国際機関、国際NGOに関するイベント情報、インターン情報等提供します。



専門・学年を超えて「共に生きる」社会の実現のために何ができるのか、考えてみませんか？(月1回程度の集まり)

応募資格：“お茶大生”

国際協力活動に関心のある方  
ならどなたでも。

初めての方も 大歓迎！！

## 【お申込み・登録先】

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

Tel/Fax 03-5987-5546

Email [info-cwed@cc.ocha.ac.jp](mailto:info-cwed@cc.ocha.ac.jp)

※お名前・学部学科・学年を上記アドレスにご連絡下さい。

担当：桑名・駒田

## 2-2 東日本大震災被災者支援 ボランティア活動兼今後の支援活動調査活動

### 【目的】

「共に生きる」スタディグループおよびがん茶から希望が上がっている東日本大震災支援活動について実施可能性を調査するため、NGO による支援活動のボランティア活動に参加しながら、被災地の情報を得る。

### 【実施概要】

#### ① 宮城県気仙沼市視察

##### 〈スケジュール〉

12月3日（土）

8:02 上野発 （東北新幹線、JR 大船渡線）

12:03 気仙沼着

13:00 気仙沼被災状況視察、気仙沼市復興対策本部、  
災害ボランティアセンター訪問

15:00 ミサンガを製作している仮設住宅の女性グループ訪問  
（気仙沼ボランティアネットワーク聖敬会）

17:00 公益社団法人 シビックフォース活動についてヒアリング  
（大島 民宿「海鳳」泊 宮城県気仙沼市浅根242-5）

12月4日（日）

10:00 気仙沼ボランティアネットワーク聖敬会による日曜児童館運営活動の手伝い

13:00 大阪ボランティア協会

「気仙沼市内仮設住宅でのたこ焼きイベント」手伝い  
仮設入居者（主に男性）との意見交換

15:41 気仙沼駅発

19:18 上野駅着

〈受け入れ団体〉公益社団法人 シビックフォース

〈参加者〉5名+引率2名（桑名、駒田）

#### ② 福島県会津若松 仮設住宅での餅つき大会ボランティア

##### 〈スケジュール〉

12月9日（金）

15:14 上野発

17:50 広田駅着

18:00 河東学園仮設住宅（福島県会津若松市河東町南高野字館の内 42-1）にてもち米  
研ぎ、雑煮下準備手伝い

12月10日（土）＊当日のみ参加 4名

6:38 上野発

9:36 広田駅着（徒歩で移動）

10:00 河東学園仮設住宅にて餅つき大会開始

運営手伝いボランティア、がん茶メンバーによるハンドマッサージサービス

被災者の方々との会話を通じた調査実施

後片付け

16:24 広田駅発

18:58 上野駅着

〈受け入れ団体〉特定非営利活動法人 ADRA JAPAN

〈参加者〉6名＋引率2名（桑名、駒田）

#### 【成果】

- ・現地を視察し、被災者、支援団体の方々の話を聞くことで、支援する際に留意していかなければいけない点を理解する機会となった。（支援する側の押し付けでなく、被災地が日々変化する中、現地の方々が求めているのはどのようなことなのかを考え、活動内容をそれに合わせ日々変化させていくこと、「被災地の方々が今後自らの力で、個人の尊厳を持ちながら生活していけるようにしていくために」という視点をもつことの重要性）
- ・これから必要となる、学生ができる支援を考えるきっかけとなった。  
（詳細は、IV「共に生きる」スタディグループ 東日本大震災支援活動レポート参照）

#### 【課題】

今回視察、調査を行った地域、団体とのつながりを活かしながら、メンバーの関心、活動の意欲を継続させ、学生が息長く行える具体的な支援活動を企画していきたい。



## 2-3 東ティモール国際調査

### 【目的】

本年度 10 月にスタディグループメンバーより、問題意識をさらに深めるため、平和構築と国造りの現場に赴き、調査する希望が挙げられた。このような学生の希望を踏まえ、これまでのスタディグループ勉強会、合宿で挙げられた学生の関心事項、現場へのアクセス、現地大学との連携可能性を考慮して、東ティモールで国際調査（テーマ：紛争後の復興支援における女性、青少年の役割、フェアトレード等）を実施する。

### 【実施概要】

・参加者：10 名（「共に生きる」スタディグループメンバーに対し希望者を募る。）

・スケジュール

参加者募集：12 月初旬

勉強会：1 月～2 月（学生主体の活動による勉強会、調査計画策定、ピースウィンズ・ジャパン講師による事前勉強会、計 6 回）

現地調査：2012 年 2 月 28 日～3 月 6 日

・現地調査実施体制

引率者、桑名、駒田。

現地手配、エルメラ県滞在は 1999 年より同国リキサ県、エルメラ県で活動を行う NPO 法人ピースウィンズ・ジャパンの協力を得る。また調査実施においては、大学間の連携により、東ティモール国立大学平和学・紛争解決センターの協力を得る。

・調査内容、方法

事前勉強会において、学生が調査テーマを設定し準備を行う。現地調査では、共通する調査先をメンバー全員で訪問し、各人のテーマに沿ったインタビュー調査を実施する。首都のディリ県だけではなく、地方部特有の問題を抱えるエルメラ県でも調査を実施し、東ティモールの主産業を担うコーヒー農家組合、関連する女性組織を調査する。

### 【成果】

・お茶大の学生が、女性、青年、学生という立場から、東ティモールの国造り、平和構築における女性、青年の役割を考えることによって、平和構築への理解を深めることができた。国際社会に求められる広い視野を持った人材育成の場となった。

・学生、青年同士の交流、連携を通じ、東ティモールのみならず、他国へも応用可能な大学間連携による平和構築活動への具体的な活動を企画し、実施する機会となった。（詳細は、「東ティモール国際調査報告書」参照）



### 3. 女子大合宿

#### 3-1 2011年度第1回女子大合宿

##### 【目的】

7月にスタートした、お茶大生による「共に生きる」スタディグループと他女子大学のスタディグループとの合宿形式による、勉強（交流）会を行い、「共に生きる」社会実現に向けて何が出来るのか、国際協力や支援に関する理解を深める機会とする。

##### 【実施概要】

- ・日 時：2011年9月1日（木）～9月3日（土）
- ・形 式：合宿（2泊3日）
- ・場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター
- ・参加者：国際協力に興味関心がある、または活動に取り組んでいる以下の大学の学生および大学院生。お茶の水女子大学「共に生きる」スタディグループメンバー、奈良女子大学、甲南女子大学、神戸女学院大学、同志社女子大学の学生35名。教員7名。
- ・スケジュール

9月1日 11:00	集合 国立オリンピック記念青少年総合センター 国際交流棟2F 第2ミーティングルーム	※宿泊費の回収、書類への記入押印。 学生1泊1500円 教員1泊2400円 ※施設の利用の仕方についての説明
11:20	オリエンテーション 石井クツ昌子 (お茶の水女子大学教授、グローバル協力センター長) 桑名恵 (お茶の水女子大学グローバル協力センター講師) 高橋 真央 (甲南女子大学 講師)	①合宿の趣旨・目的・スケジュールの確認 ②自己紹介 ③アイスブレイキング
12:00	研修室 整理整頓	
～13:00	昼食	各自、施設内
13:30	セッションI 講義 「国際協力入門—教育支援を中心に」	国際交流棟2F 第2ミーティングルーム
15:00	浜野隆先生（お茶の水女子大学准教授）	

	荷物の移動	各自
15 : 30	集合、移動 援助団体訪問 (①②いずれかの一団体) ①UNHCR 協会 (難民支援、企業との連携) ②国際 NGO ピースウィンズ ジャパン (フェアトレードと東ティモール支援。東日本大震災支援)	国際交流棟 1F 交流プラザラウンジ → 表参道 (片道 160 円) ※2 グループに分かれての訪問
17 : 45	鍵、シーツの配布等 部屋へのチェックイン、夕食	国際交流棟 1F 交流プラザラウンジ (入所手続、宿泊施設の鍵の受取は担当者が事前に行う。) 鍵、シーツの配布の際にシーツのたたみ方の実演を行う。
19 : 00 20 : 30	セッションⅡ 講義 「開発途上国への女性・子どもへの支援」 榎原洋一先生 (お茶の水女子大学教授)	国際交流棟 2F 第 2 ミーティングルーム
		学生の入浴は B 棟横の浴室を利用。利用時間、17~23 : 30 まで。
<b>9 月 2 日</b>		
	朝食	各自、施設内
8 : 45 9 : 30	意見交換会Ⅰ 1 日目の講義、援助団体訪問から思う事	国際交流棟 2F 第 2 ミーティングルーム
9 : 30 11 : 00	セッションⅢ 講義 「日本社会における外国人・難民支援、東日本大震災支援」 特定非営利活動法人 難民支援協会関係者	国際交流棟 2F 第 2 ミーティングルーム
~11 : 10	休憩	
11 : 10 11 : 40	グループ分け	国際交流棟 2F 第 2 ミーティングルーム
~12 : 50	昼食	各自、施設内
13 : 00	集合、移動 援助団体訪問 JICA (独立行政法人 国際協力機構) 地球のひろば特別展「世界は広がっている : 今	国際交流棟 1F 交流プラザラウンジ → JICA 地球のひろば (広尾) (片道 190 円)

	こそ考えよう、世界と日本の関係」	
17:00 ～18:00	夕食	国際交流棟 1F 交流プラザラウンジ→解散 各自、施設内
18:00 19:00	意見交換会Ⅱ 2日目の講義、援助団体訪問から思う事	国際交流棟 2F 第2ミーティングルーム
～22:00	グループワーク アンケート（レポート）への記入	国際交流棟 2F 第2ミーティングルーム
9月3日 ～9:00	朝食 退所手続き ※シーツの返却：リネン室 9:00 まで ※鍵の返却：D棟フロント 10:00 まで	各自 宿泊室の清掃、整理整頓、忘れ物の確認、シーツの返却、鍵の返却
9:30 11:15	グループ発表	国際交流棟 2F 第2ミーティングルーム
11:15 11:45	まとめ・合宿の評価	国際交流棟 2F 第2ミーティングルーム
～12:00	研修室を清掃、整理整頓、忘れ物の確認	国際交流棟 2F 第2ミーティングルーム
	解散	

#### 【成果】

- ・異なる地域、バックグラウンド、大学の学生が一同に会し、合宿形式で深く議論をすることができた。各発表の後には学生同士の活発な意見交換が飛び交い、参加者が3日間「共に生きる」社会の実現に向けて深く掘り下げて考えた真剣な姿勢が現れていた。
- ・「難民支援」「支援の体制」「東日本大震災支援」「教育支援」のグループに分かれて、グループワークを行い、共同で活動できるアクションプラン作りをおこなった。各グループからは、勉強会、映画祭、世界のランチフェスティバルの開催等、具体的で意欲的な活動プランが発表された。メーリングリスト等を通じて、プランを詳細に詰め、さらなる参加者を募り、大学間のネットワークによる、学生の継続した活動に発展していくことが期待される。
- ・お茶の水女子大学内では、合宿終了後も上記のグループに分かれて、それぞれの勉強会を開催し、東日本大震災支援活動、東ティモール国際調査実施につなげた。

#### 【課題】

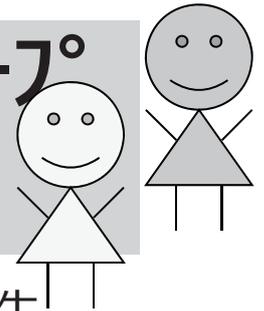
今後異なる地域の学生がネットワーク間で、どのように意欲を維持し、具体的にどの

ように活動していくのかを他大学との協議を行っている。





# 「共に生きる」スタディーグループ 女子大合宿



7月にスタートした、お茶大生による「共に生きる」スタディーグループと他女子大学のスタディーグループとの合宿形式による、勉強（交流）会です。

目的	「共に生きる」社会実現に向けて何が出来るのか、他女子大学学生との交流により、国際協力や支援に関する理解を深める機会とする。
場所	国立オリンピック記念青少年総合センター
日程	2011年9月1日(木)～9月3日(土)
応募資格	「共に生きる」スタディーグループメンバーで合宿に応募する女子大生
参加費用	約7900円(宿泊費、食費) + 交通費 ※交通費(新幹線乗車賃及び特急料金)、8000円補助あり。資料、会場費はお茶の水女子大学が負担します。※その他: 学生障害保険未加入場合は加入して頂きます。
参加大学	お茶の水女子大学、奈良女子大学、甲南女子大学、神戸女学院大学、同志社女子大学 他(予定)

### 3-2 2011年度 第2回女子大合宿

#### 【目的】

第2回女子大合宿では、第1回の合宿後の成果として、東日本大震災支援を起点として、「共に生きる」社会実現のために各大学で実施した活動の報告会を開催する。基調報告では、宮城学院女子大学 心理行動科学科学生をゲストに招き、「東日本大震災後の行動と心理」にかかわる研究発表から、支援活動の根底にある支援する側、支援される側の意識の違い、支援を通じた連帯についての理解を深める。また、女子大学の学生がそれぞれの立場で実施した東日本大震災にかかわる活動の報告を行い、学生同士が刺激をし合い、今後国際協力等のさらなる活動の輪を広げることを目的とする。

#### 【実施概要】

- ・ 日 時：2012年3月16日～17日
- ・ 形 式：合宿（1泊2日）
- ・ 場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター
- ・ 参加者：女子大学の学生および大学院生、18名、教員5名  
お茶の水女子大学「共に生きる」スタディグループメンバー  
東北、関西の女子大学生
- ・ スケジュール

3月16日 12:45	集合 国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟5F 510室	
13:00	基調講演 「東日本大震災後の行動と心理に関わる調査研究活動」 宮城学院女子大学 心理行動科学科1年	センター棟 5F510
14:00	休憩	各自、施設内
~14:20	各大学の活動報告 「東ティモールでの国際調査報告」 「陸前高田における仮設住宅への支援」 お茶の水女子大学「共に生きる」スタディグループ	センター棟 5F510
15:20	休憩	各自、施設内
~15:40	各大学の活動報告 関西の女子大学により活動発表	センター棟 5F510

16:20	「共に生きる」スタディグループ in 関西	
～16:30	休憩	各自、施設内
16:30	グループディスカッション 「大学生、女子大生として出来る事」	センター棟 5F510
17:30		
17:30	チェックイン、荷物の移動	利用の説明 書類の記入・捺印
18:30		宿泊費の徴収
18:30	夕食懇親会（立食形式）	レストランさくら D 棟 9F
20:30		
	各自 センター棟 5F 510 室（～22:00）まで 使用可	学生の入浴は B 棟横 の浴室を利用。 利用時間 17～23:30
3月17日	朝食	各自
	学生：シーツ・枕カバーの返納	C 棟 1F シーツ受渡所 (07:00～09:00)
	宿泊室・談話コーナーの清掃・整頓	
～10:00	宿泊室カード、宿泊室利用確認カードの提出 解散	センター棟（D 棟）1 F 総合利用案内

### 【成果】

- ・各大学、大学ネットワークの学生によって行われている研究調査、支援活動等の活動を  
知り、学生による活動の可能性の大きさを知り、今後の各々のグループ活動をどのよう  
に継続的に活発化させていけるのか考える場となった。
- ・多様なバックグラウンド、テーマであっても根底にある「共に生きる」社会実現に当た  
っての考えに共通することが多く、他大学と連携した活動が効果的である面がわかった。  
大学を超えて、協力体制を築ききっかけとなった。



## 4. 平和構築分野における国際調査

### 【趣旨】

グローバル協力センターは、グローバル社会における平和構築を目指し、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワーク創成を目的として、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の連携—」事業を実施している。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場づくりを推進するため、本事業の趣旨に沿う本学の教員及び学生による国際調査の学内公募を行った。

### 【実施概要】

- ・ 対象分野：  
途上国、ポスト・コンフリクト地域における平和構築に資する国際調査  
（女性、子どもの支援に関する分野、大学間の連携を促す目的の調査が望ましい）
- ・ 対象者：  
本学の教員及び学生（教員による調査の場合、学生の同行を奨励。学部生の場合は本学の教員の同行が必要。）平成24年3月上旬までに終了する調査を対象とします。
- ・ 採用予定数：5案件
- ・ 調査費用：  
1案件につき100万円を上限（旅費・滞在費、図書資料費、調査諸費用等（本学の規定により支給）
- ・ 採択調査一覧

申請者		所属	調査期間	日数	調査先	調査目的
土野瑞穂	院	人間文化創成 科学研究科ジ ェンダー学術 研究専攻博士 後期課程4年	2011/12/11 ～12/18	7 泊 8 日	韓国挺身隊問 題対策協議 会、韓国挺身 隊研究所、 梨花女子大学 (大韓民国)	『慰安婦』問題解 決運動における 韓国女性運動団 体の運動戦略に 関する調査

平和構築分野における国際調査 採択者

申請者	所属	調査期間	日数	調査先	調査目的
土野 瑞穂	人間文化創成科学研究科ジェンダー学術研究専攻 院 攻 博士後期課程	2011/12/11～12/18	7泊8日	韓国挺身隊問題対策協議会、韓国挺身隊研究所、梨花女子大学(大韓民国)	『慰安婦』問題解決運動における韓国女性運動団体の運動戦略に関する調査
Tanyaporn Budsaeen	人間文化創成科学研究科ジェンダー学際研究専攻 院 攻	2011/12/25～1/26	37泊38日	タイ、シーサケート市	タイにおける米清算と世帯保持のジェンダー分析
雑賀 葉子	人間文化創成科学研究科ジェンダー学際研究専攻 院 攻	2012/1/28～2/26	29泊30日	アジアファウンデーション、UNIFEM、UNDP、JICA、現地NGO・女性グループ(東ティモール、デイル)	紛争のジェンダー規範への影響及び安保理1325の実態把握調査
小澤 さくら	人間文化創成科学研究科ジェンダー社会科学専攻 院 攻 開発・ジェンダー論コース博士課程1年	2012/2/19～3/17	27泊28日	インド、ビハール州	開発現場での女性住民組織の役割-職業訓練等の活動による女性への影響を明らかにする-
八幡 茜	人間文化創成科学研究科ジェンダー社会学専攻 院 博士前期課程	2012/2/19～3/1	12泊13日	UNICEF Philippines他、フィリピン共和国、マニラ首都圏	ペドフィイル(児童性愛者)によるサイバーセックスのフィリピンにおける現状と課題

## 5. JICA 青年研修（アフガニスタン/女子教育）

### 【目的】

- ① アフガニスタンにおける女子教育の重要性の理解を深める
- ② 日本の男女共同参画についての理解を深める
- ③ 現地の事情に即した教授法（教材研究）を実施することができる
- ④ 日本の戦後復興と経済発展を知り、教育を通してのアフガニスタンの復興活動について具体的なビジョン構築を支援する
- ⑤ 日本の青年たちとの交流を通して、アフガニスタンの現状を伝え、アフガニスタンの国造りについて話し合うことにより相互理解を深める

### 【実施概要】

- ・ 研修期間：2011年1月11日～2011年1月27日
- ・ 青年研修員人数 16名（全て女性）
- ・ 研修日程表：別紙（ページ）参照
- ・ 場所：お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学
- ・ 実施：上記大学

### 【成果】

研修員へのアンケートによれば、本研修での到達目標には、大半が十分達成できたと回答していた。研修前と研修後の回答を比較すると、どの研修目的においても理解が進み、研修目標を達成できたようである。

授業の効率性を高めるために、身近にある資源を活用して教材を作っていたことや教師と生徒との関係が信頼関係によるものであること、また教師が生徒に心を配りながら授業を進めていることなどを知り、その点からも到達目標1の「アフガニスタンでの女子教育の改善に対する知識を得る」、到達目標3「現地に即した教授法（教材研究）を実施することができる」は、達成されたといえるであろう。研修員からは、現地でも実践可能である方法を、所属先や地域の教員に伝えていきたいという希望が多く寄せられた。

到達目標2の「日本の男女共同参画についての理解を深める」においても、男女共学の学校の見学や、女性のエンパワーメントフォーラム、国際シンポジウムを通じて、日本の現状から刺激を受け、議論を深めることができた。

また、到達目標4の「教育を通じて、アフガニスタンの復興活動（国造り）」について研修員自ら具体的なビジョン構築ができる」という項目に関しては、「勉強会を開き、日本で得た経験を他の教育従事者に伝授し、教員全員で教育改善に貢献されるようにし

たい」というコメントがあり、研修を通して、研修員各々が問題意識を具体化し、アクションプランを構築したと考えられる。

最後に「日本の青年たちとの交流を通じて、アフガニスタンの現状を伝え、アフガニスタンの国づくりについて話し合うことにより相互理解を深める」という点については、インターンやホームビジット時の学生との交流や研修を学生と共に受けることによってお互いの国の事情について意見交換をすると共に、研修を一緒に作り上げるという意識も生まれていた。研修生全員が十分達成できたと回答したことから研修の目標は達成できたと考える。

### 【課題、学び】

日本の学生・教員との交流を行うことによって、同じ世代が「平和」や「復興支援」について考え、意見を述べ合うことが非常に貴重な機会となり、双方にとって大変良い経験となったようである。ただし、研修員からはアフガニスタンに関しては受け入れ機関が「戦争が続くかわいそうな国」という印象を持っていると感じたようで、研修生からはアフガニスタンの明るい面も伝える機会がほしいとの希望も聞かれた。今後はお互い学びあう場をさらに強化したい。

今後も、研修内容を更に吟味しながらも、同世代を生きる女性、そして今後の平和を作り上げていく若者との交流の機会を持っていきたい。またこれまで受け入れた研修生のネットワークづくりなどのフォローアップもできればと考えている。



# 第4回アフガニスタン復興支援国際シンポジウム 「アフガニスタンの女子教育支援： ノンフォーマル教育の視点から」

お茶の水女子大学では、2011年度も独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、津田塾大学、東京女子大学、奈良女子大学、日本女子大学と連携し、アフガニスタン女性教員研修を行います。本研修の一環として、アフガニスタン復興支援のための国際シンポジウムを開催します。今回は、アフガニスタンにおける正規教育課程外で行われているノンフォーマル教育に焦点を当て、研究者、実践者による講演、パネルディスカッションをもとにアフガニスタン女性教員との意見交換を行います。皆様のご参加を心からお待ちしております。

**日時** 2012年1月25日（水） 14:00～16:30

**場所** お茶の水女子大学 共通講義棟 2号館 102

**内容** 総合司会：内海成治氏（お茶の水女子大学 客員教授）

**【第1部】 基調報告（14:00～14:50）**

テーマ：「識字教育と女性の自立—ノンフォーマル教育の視点から—」

講師：笹井 宏益氏（国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部 総括研究官）

**【第2部】 パネルディスカッション（15:00～16:30）**

テーマ：「ノンフォーマル教育分野における教育支援の現場から」

ファシリテーター：丸山 英樹氏（国立教育政策研究所  
国際研究・協力部 主任研究官）

パネリスト：三宅 隆史氏（公益社団法人シャンティ国際ボランティア会  
アフガニスタン事務所長）

小荒井理恵氏（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）  
プログラムスペシャリスト）

佐久間 潤氏（独立行政法人国際協力機構（JICA）  
人間開発部次長兼基礎教育グループ長）

**申し込み方法**

お名前、ご所属（お勤め先／大学名・学部・学年）、

ご連絡先（住所／電話番号／メールアドレス）をご記入の上、

**info-cwed@cc.ocha.ac.jp** または **03-5978-5546 (FAX)**

までお送りください。

**【アクセス】**

東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷駅」徒歩7分  
東京メトロ有楽町線「護国寺駅」徒歩8分  
都営バス 都02乙「春日駅（一ツ橋）行」大塚二丁目下車



**参加費無料、事前申込み制（当日参加、途中参加も可能です）**



**お茶の水女子大学**  
Ochanomizu University

【お問合せ】

お茶の水女子大学 グローバル協力センター  
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
E-Mail : info-cwed@cc.ocha.ac.jp



## 6. 公開講演会「共に生きる～本当に意味のある国際協力とは～」

### 【目的】

本学では「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」をテーマに、世界の困難な地域における女性や子どもへの支援について取り組んでいる。

その一環として、現代において世界の人々や子ども、それも暮らしの困難な地域の子どもを考えたときに「共に生きる」とはどのようなことなのかを、NPO法人「宇宙船地球号」事務局長 山本敏晴氏にご講演いただいた。本公開講演会は、教員、学生のみならず地域の皆様にも広く参加していただき、世界の子どもや人々と「共に生きる」ことを考える機会として企画した。

### 【実施概要】

- ・ 日時：2010年11月1日 14:00～16:30
- ・ 場所：共通講義棟2号館201室
- ・ 内容：①西アフリカ・シエラレオネで医療援助  
②中東・アフガニスタンで持続可能な開発  
③世界や社会に対して、私たちにできること
- ・ 講師：山本 敏晴氏（NPO法人「宇宙船地球号」事務局長）
- ・ 概要：今回は、本学が2001年以来注力しているアフガニスタンにおける女性や子どもの支援をテーマに、女性や子どもにかかわる困難な状況と、持続可能な仕組みにつながる支援方針、援助者のマネジメントの重要性について講義をしていただいた。妊産婦死亡率の高い現状や、「女子への教育によって、母親の基礎知識を上げることで、子どもの死亡率が下がる」というエピソード、そして山本氏が提唱する「国際協力師」になるための方法・手段についても具体的に触れられ、参加者は熱心に聞き入っていました。質問も多数寄せられ、講演会終了後にも続くほどだった。

### 【成果】

- ・ 本公開講演会には、167名に上るご参加を学内外からいただき、近隣地域の方々にも本学の取り組み、平和構築の重要性を伝えることができた。
- ・ 国際協力の現場、国際協力にかかわるためのステップについてわかりやすくお話しただいたことで、国際協力にかかわるキャリア支援にもつながった。



# 世界のために、私たちにできること



お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、2010年度から「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成」をテーマに、世界の困難な地域における女性や子どもへの支援について考えています。

この度、NPO法人「宇宙船地球号」事務局長の山本敏晴氏を講師にお迎えし、「世界で一番いのちの短い国」西アフリカ・シエラレオネでの医療援助について、及び「中東・アフガニスタンで持続可能な開発(国際協力)」を中心にお話いただきます。

## 公開講演会「共に生きる～本当に意味のある国際協力とは～」

日時：2011年11月1日(火) 14:00～16:30

会場：お茶の水女子大学 共通講義棟2号館201室

### 講演内容

- テーマ：①西アフリカ・シエラレオネで医療援助  
②中東・アフガニスタンで持続可能な開発  
③世界や社会に対して、私たちにできること

講師：山本 敏晴氏 (NPO法人「宇宙船地球号」事務局長)

参加費 無料  
事前申込み制



## 7. A-WiL 国際シンポジウム 2012

### 【目的】

本シンポジウムでは、アメリカ、イタリア、韓国、そして日本から、20歳前後の女子大生が集結し、その若く自由な知性としなやかな心で「過去の延長上にはない未来」を思い描く。そして、その未来へと向かう最初のステップとして“今”を創造することを試みる。その想いを「未来宣言」としてまとめる。

### 【実施概要】

- ・ 日時 2月12日(日) 9:00~18:30
- ・ 参加者：お茶の水女子大学学生、Mount Holyoke College (米国)、Ewha University (韓国)、Collegio Nuovo (イタリア) 約20名
- ・ 主催：お茶の水女子大学リーダーシップ養成教育研究センター  
グローバル協カセンター「共に生きる」スタディグループが、東日本大震災支援活動をテーマにした学生セッションのお茶大代表のプレゼンテーションを担当。
- ・ スケジュール
  - 9:00~10:30  
「ニッポンの“今”を語ろう -3.11を超えて-」
  - 10:30~18:30  
「ワタシたちの創る未来」
    - ・ 10:30~15:30 (12:00~13:00 休憩)  
未来をイメージする  
LEGO Serious Play (※)
    - ・ 15:30~17:00  
「未来宣言」策定  
今後一年間のアクションプラン策定
    - ・ 17:00~18:00  
発表
  - 18:00~18:30 Wrap up

### 【成果】

・「共に生きる」スタディグループの東日本大震災にかかわる活動を紹介し、より良い未来に繋げるため「復興」に、学生が関われる活動の可能性を示した。

・他国の学生との議論を通じて、他国の抱えている課題も、日本が抱える問題と根底ではつながっており、国境を越えた連帯で、「共に生きる」社会実現の活動を続ける重要性を認識した。



### **Ⅲ 平成 24 年度以降の計画**



### Ⅲ 平成 24 年度以降の計画

#### 平成 24 年度

1. 国内外の（女子）大学と交流を行いながら、国際協力人材育成のためのカリキュラムを提案し実、国際協力に関する人材育成プログラム（セミナー等）を開催する。
2. 各女子大学の教員、学生（院生）と開発途上国の行政官、研究者と連携して女性と子どもに関する課題に関する共同調査研究を実施する。

#### 平成 25 年度

1. 国際機関の協力を得て、これまでの取り組みを評価しながら、開発途上国の女性リーダー等を招聘し、国際会議を開催して、世界各国の女子大学と今後の国際協力支援に関する新たなモデルを提案する。  
国際社会に向けて、「女性」と「子ども」の支援をテーマとした平和構築や開発途上国支援に関する課題を提示する。



## IV 參考資料



## 1. 「共に生きる」スタディグループ：小松さん講演会報告

2011年10月19日水曜日、お昼休みの時間を使って小松映里佳さんに4カ月に渡るケニアでのインターンについて、小松さん自身のことばでお話していただきました。

ケニア人スタッフの方と協力し、学校建設・保健衛生に関する地域学習会等、地域住民の活動のサポートを担当したそうです。

平日はムイギ県での活動、週末はナイロビのアパートで活動報告・活動準備と、とてもハードな生活を送り、疲労等の体力的な問題やケニアと自分の価値規範のズレから参加型開発の難しさ、地域との長期的な関わり方や自分たち外部の組織が関わることにより、組織が撤退した後にも残る影響や責任など、たくさん のこととお話ししてくれました。

小松さんのお話の後に設けた質問の時間も、たくさんの質問が出たり、講演終了後も直接小松さんに細かく質問をしている方がいたり、とても有意義な時間となったと思います。

突然の企画でしたが、いらしてくださった方々、忙しい中講演会を快く引き受けてくださった小松さん、本当にありがとうございました。

(文教育学部グローバル文化学環3年 中島紗織)



## 2. 「共に生きる」スタディグループ

### 東日本大震災支援活動レポート

#### 2-1 気仙沼での活動レポート

○芦沢未菜（理学部数学科2年）

##### ① 全体の感想

12/3, 4の2日間の気仙沼視察で、私たちは、現地の被災状況（=復興状況）と、そこで働くボランティア、また地元の方たちの頑張る姿を見てきました。

気仙沼駅から車で5分程走ったところに、津波の被害を受けた商店街がありました。気がつくやうに、辺り一面荒廃していました。いつの間にワープしたのだろうと思うくらい、そこは異空間でした。ここが、活気のある商店街だったとは、全く想像が出来ませんでした。もう、9か月も経っているのに、まだ混沌としているこの場所は静かで、時間が止まっているようでした。その日は、雨でしたが、その雨の音まで吸い込むような、静けさを感じました。後に、大島の宿の女将さんに、地元の方が撮影した3/11当日のビデオを見せて頂いたのですが、そのビデオに映し出された町の姿はあまりに悲惨で、そこから考えれば、随分修復は進んできているのだと思います。がれきの山が至るところにありました。車がプレスされて、山積みになっていました。この車に乗っていた人たちはどうなったのだろう。なぜ、こんなに車があるのだろう、と考えたら、恐怖が込み上げてきて、息が詰まりました。半壊の船も、まだあちこちにありました。被災の範囲が広い反面、数メートルの違いで、全く被災していない場所も見られました。

翌日訪ねた仮設住宅で、私は、また必ず来ると約束しました。

今、一番思い出されるのは、仮設住宅の方たちの顔です。今でも、気仙沼でお会いした方々の顔は私の脳裏に焼き付いて離れません。

同行して下さった勝田さん、2日間ありがとうございました。今回の視察を参考に、今後の活動に繋げて行きたいと思います。

##### ② 聖敬会の活動の感想

平田さんのお話はとても分かりやすく、聖敬会の活動について知ることが出来ただけでなく、独自の理念を感じる事が出来ました。様々なボランティア団体がある中、今、本当に必要なことを考え、提供する姿勢や、被災者の自立を常に考える姿勢に、共感し

ました。そこからは、市民に寄り添う優しさと、決して手を抜かない厳しさを感じました。それが、被災者に真剣に向き合うということなのだと思います。

私たちも、ほんの少しの時間でしたが、出来上がったミサंगाの包装のお手伝いをさせていただきました。一つ一つ、思いを込めて作られたミサंगाと一緒に、エピソードカードを同封しました。そのカードには、作られた方の体験談や、今の素直な思いが書かれていました。自然と、作り手さんに思いを馳せることが出来ました。メッセージカードも、作り手さんたちに届けば、きっととても嬉しいだろうなと思いました。

また、日曜児童館では、お母様方が、ミサंगा作りに取り組む姿を見ることが出来ました。皆さん、綺麗な刺繍糸で楽しく編んでいました。こだわりのある、温かいミサंगाプロジェクトだなと思いました。

お忙しい中、熱く語ってくださり、ありがとうございました。私たちは、前に前に進んで行く聖敬会を、応援しています。私たちも、今後の活動について、考えて行きたいと思います。

シェフのシチュー美味しかったです！ 聖ちゃんもありがとう！

### ③ 今後の活動への展望

今回、私は、はっきりとした目的を持っていたわけではなく、手探りの状態で参加させていただきました。正直、今は、ただ、その状況を受け止めるので精一杯で、なかなか、考えもまとまっていません。ですが、一つ思うのは、もう一度、あの仮設住宅の人たちに会いたい、ということです。がれきの山を見て、途方に暮れました。自分に何が出来るのだろうか、悲観的になりました。ですが、あのおじさんたちの何か役に立ちたい。と心底思います。まだ具体的なことを考える程、まとまっていないので、まずは皆に、私が、自分の目で見たことを伝え、一緒に考えていきたいと思っています。

## ○ 植村奏水（文教育学部人文科学科グローバル文化学環3年）

### ① 全体の感想

私は半日だけの短い訪問だったが、聖敬会の日曜児童館、仮設住宅での大阪ボラ協のたこ焼きパーティー、お魚いちばの様子を見ることができて、良い経験になった。

仮設住宅のたこ焼きパーティーでは、仮設の方々から色々なお話を聞かせていただいて、充実した時間を過ごさせていただいた。お話の中で特に印象的だったのが、「あと2~3年で復興しないと気仙沼は滅びてしまう」という言葉だ。仕事があっても賃金が低すぎて生計が成り立たないため、このままでは人がどんどん出て行ってしまうという危機感から出てきた

言葉だったようだ。がれきを撤去し、街を再建したとしても、それ以上の復興が必要とされているのだと思った。浸水地域の建設制限が商業復興の足かせになっているという話もあり、防災街づくりと人々の復興のジレンマも感じた。

このたこ焼きパーティーには男の人がたくさん集まっていたが、仮設に入って以来初めて会った人もいるということで、コミュニティづくりの良い機会になっていたと感じた。女性支援や子ども支援はよく聞くが、意外に男性に対する支援は少ないように思う。陸前高田の集会所でも、いつも集まるのは女性と子供で、男はどこで何しているのかわからない、という状況が問題になっているそうだ。男性やイベントにも出てこないような人をいかにコミュニティの中に取り込んでいくかということは、非常に重要な課題だと思う。

私は以前、陸前高田を訪れたことがあるが、今回気仙沼を訪問して、場所によって被災状況がだいぶ違うのだということが見た目にもよくわかった。陸前高田は津波が到達したところとしなかったところの境界がはっきりわかるくらいにすべてが流されてしまっており、まるでさら地のようにになっていたが、気仙沼のお魚いちば周辺は、建物自体は残っているが、中が空洞のようにになっているという状況だった。建物は残っているのに商売は始められない、そこに住むこともできない、というのは、何もなくなってしまったところとはまた違う悲しみや悔しさがあるのだろうと思った。

今回訪問した仮設の集会所では、こちらがもてなされるような感じになってしまい、かえって申し訳なかったが、今後あの方たちに何か恩返しをしていけたらと思う。また、被災者と東京の学生を結びつけるような役割をしていきたいと思う。

## ②聖敬会の活動の感想

今回の日曜児童館は、綱引き大会と重なっていたため、子どもはあまり来ていなかったが、ミサガの講習の様子を拝見させていただいた。ミサガの売り上げが収入になるということももちろんだが、話をしながらミサガを作るという過程も重要な意味を持っているのではないかと思った。

学生から今後の活動の提案をしたときに、常に被災者の立場に立った活動を考えるように指摘をしていただいた。支援活動は、被災地のための活動であるということが第一であり、その点を疎かにした活動は本末転倒なものになってしまう。私たちが支援活動を考えるときには、常に被災地や被災者への想像力を最大限に働かせる必要がある。今回、基本的ではあるがとても大切なことを改めて指摘していただいたと思う。

## ③今後の活動への展望

私は多くのがん茶のメンバーやお茶大の学生に、復興支援活動に参加して欲しいと思っている。今回の南坂さんの提案にもきっとそのような思いや、被災地を忘れないでほ

しいという思いが詰まっていたのだと思う。被災地のことを忘れないようにする、関心を持ち続けてもらう、というような類の支援については、被災地を訪問した学生による報告会のような情報発信がひとつの方法であると思う。また、勉強会についてもお茶大内に広く呼びかけることができればと思う。

私としては今回訪問した仮設にまた行きたいと思っている。私たちは今回ただこ焼きをもらってお話をしただけだったが、仮設の方々は「また来てね」と言ってくださった。正直に言えば、何をすれば本当に役に立てるのかということはまだわからなかったが、何かまた人が集まれるようなイベントを開いたり、他の団体のお手伝いでもできたら良いと思う。ハンドマッサージも活かせればと思う。気仙沼なら日帰りでも日中の4～5時間は使えるので、学生でも参加しやすいが、交通費がかかるので継続的な支援にしていくにはさらに工夫が必要である。しかし、仮設でのコミュニティ支援+東京での報告という活動が今のところ私たちにできることではないかと思う。実際に被災地を訪れるというのは、もしかすると1つハードルが高いことなのかもしれないが、多くの学生に被災地を見てもらい、被災者と東京の学生の間に何かしらの関係をつくることができればそれはひとつの社会的なインパクトになると思う。

今後の活動については気仙沼と会津若松の視察に参加した学生とぜひ議論したいと思う。

## ○ 重松貴子（文教育学部人間社会学科1年）

私はこれまで、何らかの形で被災地に赴きたいと思っていた。しかし、意欲とは裏腹に、時間やお金を理由にしてしまい、なかなか足を踏み出すことが出来なかった。そのため、今回、グローバル協力センターの先生方が被災地に赴く機会を与えてくれたこと、大変うれしく思っている。

### ①全体の感想

私が、今回の視察を通して一番感じたこと。それは現地の方に失礼かもしれないが、「ああ、本当に起こったことなんだな。」ということだ。これまで私は、もちろん報道で知ってはいたが、それは画面を通しての情報であり、本当の意味での「実感」を持つことが出来なかった。しかし、実際に被災地を訪れると、自分の周りには、倒壊した家、地上に流れ着いた船、瓦礫があり、そして家や家族を失った人々がいらっしやった。3・11後、9ヶ月経って初めて、私は津波が東北の人々を襲ったという事実を、ありありと実感せ

ざるを得なかった。気仙沼に行かなければこうした、意識の変化が起こることはなかっただろう。

また、現地でボランティアをされている勝田氏、平田氏などの人々のお話をお聞きしている中で、彼らが本当に自分から意欲的に被災者の方々のお手伝いをしている点が印象に残った。先に挙げたように、私がこれまで被災地に赴きたいと考えていたけれど踏み出せないでいたのは、頭のどこかで自発的ではなく、義務感として行かなければならないという考えが重くのしかかっていたからなのではないかと気がついた。

### ②聖敬会への感想

「傾聴」という言葉を活動の第一歩とさせていただきあり、聖敬会の方々は、現地の被災者の方々に寄り添った活動をされているなど感じた。一口に「支援」といっても、被災者の方の本当の願いと食い違った、上からの押し付けになってしまう可能性がある。実際に、そのような活動を行っている団体は存在するかもしれないし、私自身も絶対にそうした支援を行わないという自信がない。それに対して、聖敬会は、お茶会とは異なり現地の方々と聖敬会で力を合わせて料理を作るお食事会、競争しながら現地の人々にミサンガを生産してもらい試み等、他の団体とは異なる独自のアイデアを実践していた。聖敬会への訪問は、オンリーワンの支援をする大切さを教えてくれた。

### ③今後の活動への展望

今回の視察の最後に仮設住宅を訪問した際に、被災者の方々とお会いする機会があった。その方々は、実際は本当につらい状況のはずなのに、とても明るく、気さくにお話をして下さり、私もとても楽しい時を過ごすことが出来た。そして、「また会おう」と言って固く握手をして下さった。その言葉を聞いたとき、私も心から嬉しく、ぜひ何らかの形でお会いしたいと感じた。

年配の方が大部分を占める仮設住宅の場合、そこに住む人々は大学生くらいの年齢の人と関わる機会がなく、そういった年代の人々の関わりをととても喜んでくれるという。この話を耳にした時に、私はお茶の水女子大学を含めた大学生と、仮設に住む年配の方の交流の場を持つことが出来たら、と感じた。その交流の場では、わいわいと机を囲みながら、囲碁、料理そして人生等、年配の方がこれまでの人生で身につけたことの一部を私たち大学生に教えていただく、という形をとってはどうか。年配の方は未熟な若者に何かを教えるということが得てして好むような気がする。ボランティア活動において、金銭や人脈などあらゆる面で社会人の方が長けているが、年配の方から「教わる」という点に関しては、学生の方が適任だ。私たち学生だけが出来ることとは何か、と考えた時に私はこういう結論に至った。

## ○ 根本郁（理学部数学科4年）

私自身の中での今回の視察の主な目的は『大学生として私たちができる支援は何か』ということを考えることであった。多くの方々が、様々な形で被災地に赴き、活動をされている中で、大学生である私がどのような支援をするべきなのかということに対して震災後から考えてはいたものの、実際に何か行動を起こすことができずにいた。そんな私にとって今回の視察は大きな意味をもつものとなった。

気仙沼市を訪れ、まず衝撃を受けたのは漁港付近の様子である。最近では報道でもあまり震災関連のことを耳にしなくなっていたこともあり街はもとの姿を取り戻しつつあるのではないかと考えていたため、震災から約9カ月が経った今も、漁港付近の建物は崩壊したままであり、瓦礫もあちこちに残っていることに非常に驚いた。それと同時に感じたことは、この土地は今後どのように変わっていくのだろうか、住民の生活はどうなるのだろうかということが全く見えてこないということであった。

また、聖敬会の活動について、丁寧にご説明いただき、短い時間ながら活動に参加させていただいたことで考えたことは、支援とは何かということであった。緊急援助を要した震災発生当初から被災地の現状は日々変化をしている。そのなかで現地の方々が求めているのはどのようなことなのかを考え、活動内容をそれに合わせ日々変化させていくことは支援を行う上で重要なことであると感じた。また、支援の形は様々であっても、『被災地の方々が今後自らの力で、個人の尊厳を持ちながら生活していけるようにしていくために』という視点をもつことは様々な支援に関して共通して重要であると言えるのではないかと考えた。

そして、今回の視察で大きかったのは、被災された方の生の声を伺えたことである。宿泊先で見せていただいた震災当日の映像は、信じがたいものであった。津波が街を襲い、人々が避難していく映像は現実とは思えないほどであり、この地で震災を体験した方々のことを考えると本当に胸が痛んだ。さらに仮設住宅を訪問した際には、住民の方々が温かく迎えてくれ、震災当日から現在までの生活について話をしてくださり、改めて自身も震災という出来事に今後向き合っていくべきだと感じた。

視察を通して、私がもった問題意識は5年後、10年後の被災地の方々の生活や国内外の人々の震災への関心に関することである。緊急援助を要した震災直後に比べ、報道で被災地の様子を見る機会も減り、現地への支援の手も少なくなってきている印象を受ける。しかし、今回被災地を訪れて今後の継続的な支援の必要性を改めて感じた。毎年一定の学生数がある大学というのは、長年にわたる継続的な支援を行いやすいと考えるため、継続的な支援というところに焦点を置き、今後の活動を行っていきたいと考えている。被災地で活動経験のある方のお話を伺うなどして、大学生である自分たちができることは何か、またその中で被災地の方々が求めていることは何かを様々な観点から考え、

具体的な活動につなげていければと思っている。また、国内外の方へ、東日本大震災に関して発信していく役割も果たせれば良いのではないかと考えている。震災について正しい理解をしてもらうこと、また自らが震災にあったときにどうすべきかを知ってもらうこと、自分たちにできることを考えることは世界のどの国の方々に対しても重要なことなのではないかと考える。具体的方法としては、学内での活動報告、東ティモール視察や本学で開催される国際シンポジウムの機会に海外の学生と震災をテーマに交流をもつことが挙げられる。

この視察にあたり、お忙しい中をご協力いただいた方々、そして被災地で温かく私たちを迎え入れてくださった方々には本当に感謝したい。ありがとうございました。そして、この視察を受けて考えたこと、感じたことを大切に今後のスタディグループの活動を行っていきたいと考えている。

## ○南坂葵（文教育学部グローバル文化学環3年）

### ①全体の感想

今回震災後初めて被災地を訪れました。震災が起こって以降ずっと「何かしたい。何かしなければいけない。」と思っていましたが、なかなか現地に行く機会を得ることができなかつたため、今回このような機会をいただくことができるとてもうれしかったです。

現地で実際の状況を目にした時はとても衝撃的でした。震災からもうすぐ1年も経とうというのに、津波の爪痕が痛々しいほど至る所に残っているのを見て、「これでもましになった」というお話を聞くと、当時の現地の方々がどれだけ辛い思いをされたことだろうと深く感じました。やはりテレビや新聞で見ると実際に見るのとでは大きく異なりました。

仮設住宅でお話を下さった方が当時のことを少し涙目で話されていたのが印象的でした。このように現地に行って直接現状に触れ、人々の話を聞くことがとても大切であるということを今回感じました。

今回お会いした方々は皆、とても明るくパワフルな方ばかりだったのでとても元気をいただきました。自分の将来にもとても良い影響があると思います。

### ②聖敬会の活動の感想

聖敬会でお話を聞いたことで、私のこれまでの震災支援のイメージが180度変わりました。これまではやはり、私たちが支援金や物資を送る側で、被災地の方々が受け取る側というありきたりで、少し上からの捉え方をしていました。しかし今回のお話で自立を助ける支援、自分たちで生活成り立たせる支援、という考えを聞き、はっとさせられました。これから社会に出るにあたって、様々な状況で必要になってくる考え方をたくさん教わ

りました。

（ただし疑問に思ったのが、手に職をつけ、自分たちで収益を出す、という意味では、ミサンガにそれほど需要があるのか、ということですが…もしかしたら説明して下さっていて私が聞き逃しただけかもしれないのですが…地元の有名なものやもう少し需要のあるものを扱ったらどうなのか？と思いました。）

### ③今後の活動への展望

現在シビックフォースさんをはじめ、様々な団体が支援活動を行っていると思いますが、聖敬会さんも強調されていたようにやはり地元の方々が自立されていくことが大切であると感じました。今後起こるかもしれない東海と関西が連動する大地震のためにも、東北の方々が明るくたくましく復興されていく姿を見せていただくことで、今後どのような災害が起こっても日本は立ち直っていけるのではないかと思います。

## 2-2 福島での活動レポート

### ○ 植村奏水（文教育学部人文科学科グローバル文化学環3年）

#### ①全体の感想

今回は福島県会津若松市の河東学園仮設住宅を訪問した。ADRA Japan 主催の餅つき大会のお手伝いで受け入れていただくことになっていたが、集会所の一部屋でハンドマッサージボランティアもやらせていただいた。

仮設に到着したときにまず感じたのは、建物が立派できれいであるということだ。私はこれまでに陸前高田と気仙沼の仮設住宅を訪れたことがあるが、それらはいかにも「仮設」の飾り気のない造りだった。大熊町は福島第一原発のある地域であり、当面帰れる見込みがないということがこの仮設の違いに表れているのかと思うと、改めてこの人災の深刻さを突き付けられた気がした。

私は、自治会長のご厚意により、集会所の一部屋をお借りしてがん茶のもう1人のメンバーとハンドマッサージとフットマッサージを行った。餅つきのために人が集まっていたということもあって、たくさんの方が立ち寄ってくださり、お話をしながら楽しい時間を過ごさせていただいた。

もともとハンドマッサージボランティアを行う大きな目的には、ハンドマッサージというツールを介して被災者の方々のお話を聞き、溜めこんでいるストレスを吐き出してもらうものがあったが、今回はお話を聞くという点でとてもハンドマッサージが有効だということを再認する機会になった。マッサージをするときには腕や足を出してもらうが、そのときに「避難してからやることがなくて太っちゃったのよね。」といった言葉が出てきて、そこから避難生活の話を自然にお聞きすることができた。大熊での暮らしや避難生活の苦労、原発の話もあれば、色々なうんちくを聞かせてもらったり、冗談を言い合ったりと、マッサージを通じてとても良い関係をつくることができたのではないかと思う。

私たちががん茶として以前、川崎の避難所でハンドマッサージをしたときには、女性支援の目的で女性限定で実施したのだが、今回は女性に限定せずに行ったところ、たく

さんの男性が集まってくださった。がん茶では、女子大生の強みを活かした支援として、女性支援や子ども支援ばかり考えてきたが、今回ハンドマッサージをやってみて、むしろ男性支援に強みがあるのかもしれないと思った。それと同時に、見逃されがちな男性支援にも一定のニーズがあるのではないかと感じた。

河東学園仮設住宅は自治会長の積極的な働きかけによって、仮設内のコミュニティがしっかり形成されているような印象を受けた。一方で、今回の餅つき大会に積極的に参加しているのは比較的年配の方が多く、若い世帯が多いという話の割に、若い人の存在感が感じられなかった。私は餅つきの方にはあまり参加できなかったので、詳しい状況はわからないが、若い世帯のコミュニティとのつながりが比較的薄いのかもしれないと思った。

今回も私たちはお手伝いをするために行ったのだが、むしろ気を遣って色々していただいってしまったような気がする。私たちが東京の学生として被災地に行くとき、私たちは必ず外部者である。その外部者としてどう関係をつくり、どう活動していけるのか、今後も考えていかなければならないと思う。

## ②今後の活動への展望

今回、ハンドマッサージをしているときに、ある女性が「本当に欲しいのはこういう支援なのよ。」と言ってくくださった。支援を受ける段階から自立の段階へと移ってきているということはよく耳にするが、これからも必要とされる支援もあるということは事実だと思う。ハンドマッサージのボランティアは今後もぜひ機会をつくって続けて行きたいと考えている。今回は多くの人が集まるイベントの中でできたことや、すでにコミュニティの関係ができていた仮設であったことなど、多くのプラス要因が重なっていたということを考えると、今後違う機会に行う場合にはさらに工夫をする必要があるだろうと思う。可能性のある形としては、今回のように何かのイベントの中でやらせてもらうか、もう少し大人数で行ってハンドマッサージ自体をイベントのように行うというものが考えられる。ただし、被災地で行うとなると継続的な活動はどうしても難しくなってしまうため、検討が必要である。今後はこれに加えて、あまり表には出てこない東京近郊に避難している方々も視野に入れていこうと思う。

また、今回男性支援の必要性を感じたので、これについても検討していきたい。

## ○ 笠智遥（文教育学部人間社会科1年）

—ADRA JAPAN主催の餅つき大会ボランティアの感想—

### ①全体の感想

3月に東日本大震災があってから、街頭募金に協力することくらいしかしてこなかつ

たが、今回は 1 日という短い日程ながら現地に赴く機会に巡り合えたことを心から感謝している。福島県に着いて真っ先に感じたのは、とてつもない寒さである。仮設住宅に着いて真っ先に驚いたことは、住民の方々の元気と明るさである。大熊町とえば、ただ被災しただけでなく、原発のためにいつ自宅に戻れるかもわからない状況であり、他の被災地より深刻で悲愴感が漂っているのではないか、そのような中に自分が入って行って何ができるのだろうかなどと心配していた。しかし、実際に行き、住民の方々と一緒にお餅をこねたり、丸めたり、食べたりするうちにとても楽しくなった。笑ったり、雑談をしたりするうちに、ちらほら仮設住宅の不安な気持ち、実家のことなどのことも聞くことができた。私も、お茶大の後期試験を控えた前日に被災した。同じ日に被災したにも関わらず、私は上京して何不自由なく大学に通うことができた。その一方で、福島を含め多くの東北の地域ではいまだに仮設住宅暮らしをしている人がたくさんいる。何だか申し訳ない気持ちでいっぱいになる。これからどのように被災地と関わっていくか、しっかり考えていきたい。また、今回、仮設住宅街の中にある公共の場（公民館）にお邪魔させていただいたが、多くの支援物資の段ボールがあることに気付いた。中には、ドッグフードが送られて来たり、宗教書のようなものが送られて来たり、本当に必要なものかわからないものが結構あった。好意や善意からであろうが、被災地の需要に合ったものかどうか確認してから寄贈してこそ、有効な支援になるのではと思った。先日、新聞でボランティアや支援・協力などは、時として一方的な押し付けになってしまっていないか、助けてやっているという傲慢な気持ちになっていないか、もう一度謙虚に考えようというような内容の記事を目にした。そのことも頭に入れて、これからの活動につなげていきたい。

## ②今後の活動の展望

- ・今回のようなイベントの企画
- ・原発について、放射能について勉強する機会を設ける
- ・必要があれば、学内で支援物資を集めたり、ADRA JAPANなどのボランティア団体に寄付を募ったりする

こうした取り組みを通じて、被災地と直接的・間接的にかかわり続ける。

## ○ 中島紗織（文教育学部グローバル文化学環 3 年）

### ①感想

まず ADRA Japan の橋本さんのパワーに圧倒され、現地の方はもちろん、一緒に活動する私たちまで元気にさせるようなパワーを感じました。直接お会いする前から、電話口からもそれが伝わってきて頼もしかったです。

今回の河東学園仮設住宅は、仮設住宅に対して持っていたイメージよりも被災前の近所の方々が多く入っていたようで、そういった点では、ご近所同士で助け合って生活しやすいのかな、と感じました。けれども、やはり仮設住宅で共通する音の問題は、大きなストレスになっている改めて実感しました。夕方～明け方は、話し声が筒抜けになってしまい、掃除する時間にもとても気を使っているとのことでした。

「震災から 9 ヶ月も一体何をしていたんだろう…やることもなく、ゴロゴロしてばかりいたよ」という言葉からも、仕事などやることがない辛さを直に垣間見ました。イベントの準備中は、みなさんととてもいきいきとして見えました。

また、今回は“がんばろうお茶大”（ガン茶）さんと合同で参加し、ガン茶さんが行ったハンドマッサージのコミュニケーションツールとしての効果を感じました。近い距離でお話もできるし、体温が伝わるマッサージは、とてもよかったように思います。その際、年配者からマッサージを勧める、コミュニティ内での配慮を見て、住人の方々の配慮を感じました。

正直、イベントのお手伝いに行ったものの、大したお手伝いはできず、お餅だけでなく、りんごやキウイなど、たくさんごちそうになってしまい、何をしに行ったんだろう…という思いもありました。けれども、マッサージのところで冗談めかして言っていた「若い人に触られるのがうれしい」ということや、「こうして来てくれたことがうれしい」というのは、あながち社交辞令ではないのかな、若者が行って話し相手になるだけでも、少しくらいの元気づけをできるのかな、と短い時間でしたが住人の方々と過ごしていて感じました。別れ際に、よく話を聞かせてくれたお母さんも私も、少し涙目だったくらい、一緒に過ごせたことには価値があったのだと感じています。今回限りにならないよう、また必ず、この河東学園仮設住宅の方々を訪れたいと強く思いました。（お土産は、お母さん方ご希望の赤いパンツにしたいと思います！（笑）

最後になりましたが、ADRA Japan のみなさん、引率の先生方、ありがとうございます。

## ②今後の共に生きる

大学からのバックアップが充実しており、桑名先生や駒田さんが相談に乗ってくれアドバイスをいただけるという点で、安心して活動ができるコミュニティだと思っています。

一方で、強制力の弱いグループであり、メンバーも他の活動の合間として参加しているため、強いリーダーシップを発揮する人材の欠如やメンバー間での密な人間関係の構築、そして何より活発な活動が難しいとも感じています。だからといって、強制力をもたせるべきなのか、というのも、気軽に参加したかったメンバーを遠ざけることになるかもしれない、という懸念もあるかと思っています。

特徴の一つである、他の女子大学との連携についてですが、距離的な原因もさること

ながら、グループの活動への熱の入れ方の違いが、連携を難しくした 1 番の原因だろうと私は思っています。(自分も含めて、ですが。)

個人的な話になるが、しばらくは就活を第一に生活することになると思うので、そちらが落ち着いてから、ともに生きるとしてまた活動に参加したいと考えています。

## ○ 根本郁 (理学部数学科 4 年)

福島県会津若松市にある大熊町民の仮設住宅を訪問し、ADRA JAPAN 主催の餅つき大会の手伝いおよびヒアリングを行った。この 1 週間前に訪れた宮城県気仙沼市での光景や住民の方々の様子とは多々異なるところがあり、ひとくくりに被災地の状況を物語ることはできないのだと改めて実感させられた。

まず、餅つき大会の手伝いから見てきたのは、震災前の人々の暮らしぶりや震災が与えた影響であった。震災前、大熊町では、多くの家庭で餅つきを行っており、各家庭に道具が揃えられていたという。しかしながら、福島第一原発の影響で避難区域となり、家から持ち出せるものは限られてしまい、もちろん餅つきの道具は仮設住宅に持ってくることはできなかったそうだ。このような住民の方々の声からこの餅つき大会が行われることになった。住民の方々のそのような声から、餅つきが各家庭の楽しみであり、子供に伝えたい日本の文化であったのだろうということが想像でき、震災により失ったこと、困難になってしまったことは私たちが耳にしていることよりも多様にあるだと感じた。

餅つき大会は自治会の方と協力して行われたため、仮設住宅の中を見せていただいたり、住民の方々と長い時間お話をできたりと、今回の視察は非常に有意義なものとなり、見えてきた現状、問題点が多々あった。まず、仮設住宅ではプライバシーが守られにくく、また落ち着いて生活することが困難であるという声が多く聞こえた。また、改装や防寒対策の工事の進み悪いという声もあり、仮設住宅で暮らすということが住民の心身の疲労に大きくつながっているのではないかと感じた。このような問題は被災各地で挙げられていることであろうが、今回の視察で特に印象に残ったのはやはり、こちらの仮設住宅の方々は福島第一原発事故に伴う問題を抱えているということである。震災直後は揺れに対するあまりの恐怖ゆえに原発の存在すら忘れ、さらに原発事故に伴い、避難を促されたときにも「2、3 日で家に帰ることができるだろう」と思っていたそうである。しかしながら、避難をしてみると、家にはいつまでの帰ることができず、この先もどうなるかわからない状況で現在も生活をされている。こちらの仮設住宅は他の仮設住宅よりもしっかりした作りだという印象を受けたが、「しばらくここで生活しなければならないからなのだろう」と多くの方々が口にしていた。大熊町に戻ることができるかわからない現在の状況で、引っ越すことや留まることを

家庭の事情等をふまえながら、住民の方々が日々考えていらっしやるのだろうと思うと胸がとても痛んだ。と同時に、5年後も10年後も、東日本大震災のことを自らも考えていきたいと強く思った。また、求められる支援は時が経つにつれ変化していくのだろうと思うし、特に被災地の方々の自立した生活のために、求められる支援は多々あるのだろうと考えた。

共に生きるに参加し、「共に生きる社会にするために女子大学生としてなにができるか。」ということ日々考えてきた。これは本当に求められていることなのかと考えることはとても大切なことだと思うが、そこが活動をうまく進められない理由でもあった。今回の視察を通して実際に現地を訪問し、ヒアリングをすることがいかに重要であるかを実感し、今後も現地の視察だけでなく、被災地での活動に携わっている方々にお話を聞くなどして、活動につなげたいと考えた。また、区長さんとお話のなかで学習支援に関しての話があった。大熊町から現在の仮設住宅に避難してきた中学生も、会津若松市内の高校に行くことになり、数名が受験を控えているが、震災の影響で学習進度がはるかに遅れているようだ。これに対する支援を何かできないかということであったため、ニーズを調査し、最も良い方法を考え、実現に向け動いていきたいと考えている。また、前回と今回の視察を通して男性への支援の手が少ないのではないかという印象を受けたため、今後このことに関しても考えを深めていけたらと思う。

今回の視察でお世話になった ADRA JAPAN の職員の方からも多くの良い刺激を受けることができた。女性として働いている方の姿を見るのは、大学生である私にとってそれだけでも得るものは大きいですが、今回お二人からは、強く明るく前向きに、そして人々に寄り添って仕事をしていることが感じられ、とても輝いてみえた。将来自分が何をするにせよ、輝きを持って生きていきたいと感じた。2日間本当にありがとうございました。



## 事業担当者、執筆者一覧

センター長 石井クンツ昌子

講師 桑名恵

センター員 石井朋子  
荒木美奈子  
榊原洋一  
浜野隆  
由良敬一

客員教授 内海成治

客員研究員 スルタニ・トロスペカイ  
高橋真央

アカデミックアシスタント 上中佐江子  
駒田千晶

執筆協力者 上中佐江子、駒田千晶、中島紗織  
\* 敬称略 (50音順)、学生参加者を除く

編集 桑名恵

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 23 (2011) 年度 評価報告書

2012 年 3 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

TEL/FAX 03-5978-5546

E-mail: info-cwed@cc.ocha.ac.jp

印刷：株式会社インフォテック

---